

Title	情報活用基礎A(応自1セメ)を担当して
Author(s)	押鐘, 寧
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2011, 12, p. 45-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70321
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

情報活用基礎 A (応自 1 セメ) を担当して

押鐘 寧 (大阪大学 大学院工学研究科 精密科学・応用物理学専攻)

平成 22、23 年度と、応自の第 1 セメスタに開講されている「情報活用基礎 A」を、CMC1 階の情報教育教室(第 1)で担当、実施した。両年度の実施内容は、この講義の設立以来、検討・改良が重ねられた結果として、概ね以下の通りであった。

1. ガイダンス、パスワード変更
2. Web、メール、検索(応自の研究室の Web 閲覧)
3. 図書館活用法(図書館職員による説明)
4. 文書作成(英語論文アブストラクトの和訳)
5. プレゼンテーション A(説明と班分け)
6. 作業日(プレゼンの作成作業)
7. プレゼンテーション A 発表会(前半)
8. プレゼンテーション A 発表会(後半)
9. プレゼンテーション B(班再編, 企画書作成)
10. 作業日(プレゼンの作成作業)
11. 作業日(プレゼンの作成作業)
12. プレゼンテーション B 発表会(前半)
13. プレゼンテーション B 発表会(後半)
14. 情報倫理に関する WebCT コンテンツ視聴
15. 同上(視聴の感想と関連事例の調査)

応自の各研究室の HP を閲覧した感想、ランク付けなどをワードファイルにまとめて報告、英語論文のアブストラクトを和訳して関連情報を調査添付して pdf ファイルで報告、といった作業をメールで行わせた。その後、パワーポイントによるプレゼン中心の演習へ移行した。プレゼン A では、クラス内を 4 人程度の班に分け、社会的に関心の高い、科学技術系を中心としたタイムリーな話題を提供して、それらの背景、解説、現状、利点、問題点などのスライドを準備させ、各班 5 分で発表させ質疑応答も行った。プレゼン B では、プレゼン A の結果を踏まえて、発表したいテーマの希望を募り、班を再編して、賛成、もしくは反対の立場を明確にしたプレゼンを準備、発表させた。

教室によっては、同じテーマについて賛否両班を編成し、ディベート色を強めていたようである。

プレゼン A、B とともに、評価シートを配布して、各班の発表内容について全員に審査させ、自己評価も行わせた。プレゼンに含める情報を、ネットなどで検索、収集し、流れを構成させてプレゼンにまとめさせる内容は、およそ講義名に即した授業になっていると思う。何回かのプレゼン準備作業の回には、各班に分かれた顔をつきあわせての作業となり、入学して間もない学生間のコミュニケーションが深まる点で、とても良い場を与えているようにも思った。

ただ、発表後の質疑応答の場面になると、下調べ、下準備、本当の自分の意見というものがない事実が浮き彫りとなり、情報の受け売り、並び替え、巷の議論のコピー以上のものではない発表が少なくなく、情報「活用」なのだろうか?と疑問に思ったこともあった。また、インターネット、電子メール、ワープロ、プレゼンは、昨今の生活や教育環境を鑑みるに、大学 1 年生は、それなりの経験を積んでいるようなので、大学生生活後半のためにも、エクセルもしくはデータ処理ソフトによる、簡単なデータ処理の演習を組み込めたらと思った。さらに、学生とのメールでのやりとりの中で、携帯電話等の影響であろうが、砕けすぎ?一言のメモ?といった文面や、不自然な謙譲語、丁寧語が多々見られ、社会的なマナー、秩序、ルールに則したメール(文書)のやりとりを、こんな社会だからこそきちんと教え込む、修正してやるのが大事だと思った。

4 年生以降の研究室の学生でさえ、「ため口」「話し言葉」「会話の一部」といった類のメールを送信してくる例が多く、就活での会社等とのやりとりにおいて、きちんとした対応ができていいのかと心配な昨今、大学生生活スタート時の学生は、かくも幼稚なかと、社会人へ近づいてゆく緊張感の盛り上がり欠けた状況に、甚だ落胆した。相手があつての情報活用・伝達であり、社会的みみず腫れの防止に繋がる側面も有した、情報教育系の講義であることを願ってやまない。